

# くちびるに歌を持って 心に太陽を持って

74

## こんなこと

小檜山博 絵 網中いづる

炭鉱の閉山で九〇〇〇人いた人が二二〇人になった寒村に呼ばれて話したあと、係の人に温泉風呂へ案内された。草っ原に建っている板囲いに屋根をつけただけのバラックだ。

四<sup>キ</sup>山奥から引いてきたぬるい湯を週に一回、日曜日の午後二時から六時まで灯油で沸かし、一五人ほどの村人が入りくるといって湯を沸かしたり捨てて湯船や床を洗うのを小森さんという七六歳の男性が、村人のために自分勝手に一人でやっているという。

小森さんは一四歳から地下に入って石炭掘りをして家族を助けるが、間もなく父が病死。長男の小森さんが一人いる弟と妹の生活を見るがやがて母も死に、小森さんは寝ないで働いて弟と妹を育てたという。

小森さんは二〇年前に奥さんを亡くし、二人の子どもは都会で結

婚している。いま小森さんは頼まれもしないのに毎日、一人の独居老人の家を回って歪んだ玄関の戸を直したり、トイレを直したり風呂場を作ったりするそうだ。材料は自分で集めてくるという。村人がお礼を出しても年金ももらっているからと、けっして受け取らないという。

小森さんは道ばたにコスモスなどの草花を植え、自分で経費を出してお年寄りを集めてカラオケ大会やダンスパーティーを開き、森に鳥かごを設置する。冬は独居老人宅を回って屋根や道路の雪はねをする。

★  
風呂へ着くと小森さんが笑顔で迎えてくれた。ぼくが、村人が感謝してますよと言うと「なんもだ、たいしたことしてない」とそっけない。風呂へきた七〇歳くらいの女性が「小森さんがいなかったら私ここにいない。都会にいる娘が出てこいっていうけど行かない。小森さんがいるから私ここにいるんだもの」と言った。

★  
あれから九年たったが、ぼくは小森さんが別れぎわに言った「こんなこと馬鹿くさいと思ったらできない。なんだってみんなが喜ぶ顔を見るのが楽しいんだ。人に声をかけられるっちゃうことは嬉しいよ。人間、人に声をかけられなくなったら終わりだ」という言葉を忘れない。

こひやま・はく 作家。1937年北海道生まれ。83年小説『光る女』で泉鏡花文学賞受賞。同作で北海道新聞文学賞受賞。97年札幌芸術賞受賞。2003年小説『光る大雪』で木山捷平文学賞受賞。05年北海道文化賞受賞。07年北海道功労賞受賞。11年鹿追町自治功労賞受賞。現在は、神田日勝記念美術館名誉館長、NPO法人北の映像ミュージアム館長、ゆうばり国際映画祭実行委員長などを務める。その他の著書に『小檜山博全集』『漂着』（柏繪舎）、『人生讃歌』（河出書房新社）など多数。